

先端的プロジェクト型研究・報告 2

大学生による学校参加ボランティア・プロジェクトに関する実践的研究

水原 克敏

東北大学大学院教育学研究科

本研究は、教育学研究科全体の協力体制のもと、大学における知的・人的財産の還元と、社会との連携を行うためのネットワークづくりに関する基礎的・実践的研究を行うことを目的としている。以下、本年度、新たな進展をみた学校参加ボランティア・プロジェクトに関して報告する。

1. 学校ボランティア・プロジェクトの趣旨

学生を学校ボランティアに派遣したいと構想したのは、大学 1 年生対象の授業「自分」（2001 年「基礎ゼミ」、2002 年以降「総合科目」、いずれも全学部学生が対象）の成果に負っている。その授業では、さまざまな人たちの人生経験を聞かせ、かつ討論させることで、彼らの「自分探し」を支援することを狙いとしてきたが、その狙いをいっそう達成するためには、「自分砕き」の実際的な活動の場を提供するほうが効果的であると考えた。

東北大学の広報パンフ「まなびの杜」（2003 年 No.24）に「教育提言」を求められたので、私は、その場を利用して次のように説明している。「私は、学生たちと話していて、『人づくり』のための具体的な活動をさせたいと思うようになりました。今年度から、学校参加のボランティアをお世話することにしました。学生たちが、小・中・高などへ行って幼い少年少女たちと話しあう機会を持つことがより効果的ではないかと思うようになりました。それで、学校のお手伝いをするボランティア活動を全学部の学生たちに呼びかけます。」と。

そういうわけで、学生の「自分砕き」、人間的力を形成するための場として、学校参加のボランティアが望ましいのではないかと思い、その企画をしたのである。さらに発展させて様々なインターンシップに参加することも望ましいと考えている。

学校の側から見れば、総合的学習や選択教科の設定を初めとして特色ある学校づくりが課題であり、他方、いじめ、不登校対策などの困難な課題にも直面しているので、外部のボランティア参加が不可欠な状況にある。また、少子化の影響で、若手教員の配属が著しく減少しているため、青年たちが学校に参加することの影響は、児童・生徒たちのみならず教師にとっても良い刺激になるはずである。ただし、今日の青年は、ある面では、人間的鍛えが足りないため、使いものにならなくて、かえって迷惑をかけるのではないかとい

う懸念もあるが、プラスとマイナスを総じて考えれば、東北大学の学生ボランティアはきっと学校に貢献できると判断したのである。

他方、学生をボランティアに送り出す側から見ると、青年が「自分探し」を始める最初の場としては、学校は教育的で安全であるし、私の所属する教育学部の専門性からもお話しすることが容易であるという判断があった。また、学生の「自分探し」は、その人を閉じ込めている「殻」を自問自答によって内側から破ることが望ましいので、大学教師が学生に説教するよりも、少年・少女たちからさまざまな質問を受ける方がはるかに効果的であるにちがいない。学校という特殊な世界ではあるが、それなりに一種特有の現実があるので、教師でもなければ生徒でもない立場から、多種多様な問題に直面することを通して、学べることが多いに違いない。怒ったり笑ったり泣いたり悲しんだり喜んだりする人間的接触が、学生たちの「自分探し」を促進するに違いない、と考えたしだいである。

2. ボランティア参加学生の問題意識

ボランティアに応募してきた学生たち約100人位に、どんなことをやってみたいか、どんな条件が望ましいか、を問うてみると、次のような答えがあった。

1. 音楽の授業の手伝いをしてみたいです。家庭科はちょっと厳しいです。(法学部・女)
2. 数学を解り易く教えることによって、面白さを伝え、数学嫌いをなくしたい。高校で陸上部だったので、練習を指導したりメニューを考えたりしてみたい。(理学部・男)
3. 部活動を見てあげたい。授業の補佐や質問の受け付け役をしたいです。(教育学部・男)
4. 人と接することが好きなので、できる事があれば何でもしたいです。(文学部・女)
5. 総合学習の手伝い等。(教育学部・女)
6. 基本的に遊びを中心にした活動に取り組みたい。具体的には、小中学校の総合的学習に参加したり体験活動のサポートをしたりしたい。条件としては、月一回程度で近場の学校です。活動の費用や交通費は出るのでしょうか。(教育学研究科・女)
7. 授業に参加できるということで、歯学部 of 僕でも、教育学部の活動に参加してみたいとつねづね思っていたので、参加したいと思います。やる気と気合はありますので、是非よろしくおねがいます。(歯学部・男)
8. 仙台の合唱好きの大学生で合唱団を結成していますので、訪問演奏などの機会があればやってみたいです。また、普段はあまり表にでることのない港の大切さを伝えたいと思っています。(工学研究科・男)
9. 授業のアシスタント、工学部に推薦で合格してから他の人に教えたり先生の仕事に興味を持ちました。また、小学生と触れ合ったり、中高生とかと一緒に話をしたりして、自分の幅を広げられるようなこともしてみたいと思っています。(工学部・男)

10. みんなで工作みたいなのをやってみたい。あとは条件も希望もなく何でもやってみたいです。人と関わってみたいので。(工学部・女)
11. 道徳の授業で生徒にまじってディベートをしてみたい。(教育学部・女)
12. サークルが茶道なので、部活に参加するのでしたら茶道などがいいです。運動は得意ではないです。(教育学部・女)
13. 運動部のアシスタント、総合的学習の授業のアシスタント、生徒に自分の体験を話してみたい。校内合唱コンクールに向けて生徒を指導しながら、いい賞を目指してがんばってみたい。(教育学部・女)
14. 遠足・社会見学の付き添い。高校生に、大学で何を学ぶのか、大学生活について話してみたい。(教育学研究科・女)
15. 1年の時にゼミで授業を作ってみて、中学校で実際に授業をやってみて、勉強になりました。また、やってみたいと思ったので、総合的学習を作って実習に行きたいです。また、教科教育のアシスタントや実習もしてみたいです。与えられたカリキュラムと作るカリキュラムの双方に興味があります。(教育学部・女)
16. インタネット上の教育用コンテンツを作りたくて、そのリサーチをかねて積極的に参加したいです。(教育学部・男)
17. 小学校に一番行ってみたい。子どもが好きなので積極的に参加したいと思っています。あと、教師になるかどうか迷っているのを参考にしたいと思っています。(教育学部・女)
18. 子どもたちとじかに触れ合いたい。(文学部・女)
19. 子どもたちと楽しみたい。(工学部・男)
20. 特に小中学校希望。実際の現場で子供たちとぜひ関わりたい。どれだけお手伝い等できるかはわかりませんが、今子どもたちは何を感じ、どう学んでいるかなどをぜひ知りたいです。特に総合的学習に非常に興味があります。(教育学部・女)
21. 中学生や高校生の悩みを聞いてあげたいです。(理学部・女)
22. 授業を丸一時間受け持って教えたい。(法学部・男)
23. 以前、「松坂子どもNPOセンター」会員だった頃、高校生・中学生だけで3泊4日に及ぶ夏期キャンプの企画をし、小学生から大人まで70以上にのぼるキャンプを成功させた。その時の面白さ、感動、成長等々を、子供たちと共有したい。(教育学部・男)
24. 生徒さんと接する機会が沢山あればなあ、と思います。何でもやります。原付があるので遠くでも可です。(教育学部・女)
25. 子どもとのコミュニケーションができれば何でもOK。(工学部・男)
26. 高校生に自分たちが学んでいること(特に数学、化学など)が、どういう風に大学での勉強に結びついていくか、ということを教えたい。又、環境問題についても専門

で学んでいるので、それも伝えたい。(工学部・男)

27. 今、E-LINKというボランティアサークルで活動しているのですが、もっと活動の幅を広げていきたいと思います。大学生として、自分が成長するだけでなく、地域社会に少しでも貢献できる活動がしたいです。サークルとしては、サタデースクール等の経験もあるので、是非、この機会に参加したいと思います。(工学部・男)
28. ボランティアを通して地域の人たちや小学校・中学校・高校と交流をもっているのが楽しみです。今、世の中では、教育の重要性が叫ばれています。私は工学部の学生ですが、研究だけでなく人間としての成長も必要だと思うので、そういう部分でも学んでいければと思います。(工学部・男)
29. 土曜日に小学生との交流活動や地域の清掃活動などを行ってきました。もっとボランティア活動の幅を広げていきたいということで、今回応募させていただきました。今のこの社会において、子ども達へのお兄さんとして良いものを伝えていくことが重要であり、またその中で自分自身も成長していけるのではないかと考えています。(工学部・男)
30. 語学の授業のアシスタント、部活動の指導またはアシスタントがしてみたいです。音楽部であれば、たとえば吹奏楽部など管楽器を扱うグループの指導ならできると思います。(文学部・男)
31. 中・高で、TAをやってみたい。実験準備など。(理学部・男)
32. 授業アシスタント、部活動、進路指導等、その他相談もやってみたいと思います。化学実験も指導できます。(理学部・男)
33. 小学校に行ってみたいです。中学生・高校生は怖いです。(経済学部・女)
34. できるだけ多くの人と関わることがしたい。生徒と一緒に考えるようなことがしたい。実験や実技など普通の授業とは違うことで手伝いをしたい。(工学部・男)

このように学生たちは、児童・生徒との直接的な触れ合いなどのコミュニケーションを通じて人のため地域のために貢献することを求めている。大学で、理論的な原則を学び、他方で、小中高の児童・生徒との触れ合いを通して、人間理解、社会理解を深める実際的な機会を持つことは、今後学生たちが深く広い教養を形成する上で大切なことである。それは諸科学探求の基礎形成にも通じるはずである。

3. 学生のボランティア体験と感想

学校参加ボランティア・プロジェクトに参加した学生には、その都度、活動内容と感想などの報告書を提出してもらっているが、次に見るように、大学では得がたい体験と感想が見られ、新しい学びへの契機になっている。

1. 小学校6年生対象、「留学生との討論会」に向けての準備活動の補助、生徒たちのテーマ（戦争・環境・スポーツなど）にあわせて4つのグループに分かれ、そのうちの一つのグループを担当し、模造紙に「討論会作戦表」を作成する上でのアドバイスをした。グループ別の活動は30分間。今、子供たちが社会で起こる様々なことに対してどんな疑問を持ち、どんな意見を持っているのかなど少しでも垣間見ることができた良い機会になったと思う。私なりに多くはないけれどアドバイスはできる限りすることができたと思うが、30分という時間は短すぎた気がする。もっと長い時間の中でできるだけグループの一人一人ともっと対話できたらよかったと思う。けれど私自身非常に勉強になった有意義な一日だった。（文学部3年・森田亜由美）
2. 小学校6年生の総合的学習の時間、留学生との討論のための準備のお手伝い（模造紙のフローチャートづくり）。フローチャートを作るために生徒たちに話し合いをさせ、アドバイスをすることが目的だったが、フローチャートにすることにこだわりすぎて、生徒たちを急かしてしまったように思う。その点は反省すべきであると思う。また、指示することの難しさを感じた。生徒たちは各自自分の興味を持っているテーマについて調べたが、動物保護や病気、環境問題など、さまざまなことに関心を持っていることがわかった。（教育学部3年・中松めぐみ）
3. 相談室での学習指導、高校2年生の女生徒2人に数学を教えた。あとは、その日によって、来た子の勉強を見たり、問題の解説を作ったり、先生方とおしゃべりをしたりした。いつも教えている2人には顔を覚えてもらった。それ以外の生徒とはあまり接する機会がなく残念。問題の解説づくりや、学力向上を期待されすぎると、ちと困る。「好きな時に来てもらって良いよ」と言われているが、逆にやりづらい時もある。もう少しはっきり日時を決めたほうが迷わなくてすむ。生徒と仲良くなれるのは良いけど、「これから来れなくなりました」という状況になった時に、「始めないほうが良かった」という結果にならなければ良いけど。-----。どうなのかなと思う。（工学部2年・柳沢祐介）
4. 小学校6年生のクラスの算数の授業に入り、傍らで見ながら、少しつまづいている子にはちょっとヒントをあげたり、間違いを指摘したりした。また、生徒が解いた練習問題の添削（丸付け）をした。勉強を教えることの難しさは言うまでもないが、それは慣れるより仕方がないと思う。何より難しいと感じたのは生徒一人一人の心を掴むことだ。やはり生徒に受け入れてもらうためには個々に応じた対応が必要である。例えば、「こんにちば」と挨拶して普通に「こんにちば」と返してくれる子もいれば、「ご機嫌いかが？」や「おっす」、「HELLO」などと言わなければ返してくれない子もいる。マニュアル通りにしゃべってあげれば良いというわけではない。一人一人の心の動きは掴まなければいけない。たかが90分の活動だったけど、そのことばかり考えていた。（理学部1年・鶴木洋輔）
5. 小学校6年生の算数の授業の補佐、問題の丸付け、教室を回りつつ、ついてきていな

い子の指導をした。同じ問題でも、生徒によって解き方が違うのが興味深い。私と正規の担任の2人で丸付け等をしたのに、生徒に対し十分な指導（例えば、違う解き方に対するヒントや間違いに対する十分な指導）ができたとは思えない。まして、担任一人の時はどんなに大変だろうと思われる。このようなボランティアを今後も続けていくべきだと思う。今回、他のボランティアにも参加したかったが、予定があかず、火曜の午後だけとなった。日時に関して私たちがもっと参加しやすいように図ってほしい。例えばボランティアの空いている時間を集計するなど。（理学部1年・香川朋和）

6. 4年生の総合的学習で校外に出てゴミ拾い等をする付き添いをした。4人の班に大学生が2人ついた。4人のうち一人はダウン症であった。その後、給食をいただいて、昼休みまで一緒にいた。とても楽しく活動できた。校外に出て学生だけで連れ出すのは不安だったが、何もなくて良かった。（法学部1年・福田文人）

7. 総合的学習の時間の4年生の補助をしました。生徒がそれぞれ興味のあるテーマに分かれ、その班単位の調査を引率しました。具体的には、リサイクルと公害の班を担当して、校舎の周りのゴミを拾って写真をとったり、街灯についているカサを調べて写真をとるまくったりした。拾った空き缶は、怪獣をつくるためにきれいに洗っておきました。最初は、小学生に無視されたらどうしようと不安な気持ちでいっぱいでしたが、みんなすぐに寄ってきて話しかけてくれたのでうれしかったです。同じ学年といえども生徒には聞き分けの良さなど色々なところに違いがあり、同様な対応をしては傷ついてしまう子もいて、先生は大変だと思いました。総合的学習の後にも、給食みんなで食べたり休み時間にお絵かきやサッカーをしたりと、とても充実した活動となりました。機会があればまたぜひ参加したいです。（法学部1年・沼田知佳）

8. 東北大学志望生徒（高校1年・2年）に対し、勉強方法、受験までの勉強計画、大学での様子などについて話しました。生徒の皆さんは勉強方法についての心配もありましたが、それ以上に精神的なもの、つまり「自分の今やっている勉強方法は大丈夫なのか」という疑問があったようです。そんな疑問に対し、自分の経験を語ることで、生徒の皆さんの心配を少しでも解消できたのではないのでしょうか。高校生の皆さんと話すことを考えている時、今までの自分の姿を振り返って学んだことが多くありました。自分が少し成長することができたと思います。このような機会に出会えてよかったです。（工学部3年・森田有一）

9. 「地元にある東北大学を、そこに学ぶ学生さんたちを通して理解しよう」という趣旨のもと、受験勉強へのモチベーションをあげるべく、私たち大学生が自分自身の経験を踏まえて、受験勉強プランや各教科の勉強方法についてアドバイスした。また、大学生活についての話もした。たいして受験勉強したことがなく、引き受けたものの果たして自分にこのボランティアが務まるのか、不安を抱えての参加となったが、あっという間に時間は過ぎ、思ったよりうまくいったのではないかと思います。話すうちに話したいことが

増えて時間ももっとあればよいとも思った。あと、大学生活についての話で、学部の勉強の仕組みみたいなことしか話せず、勉強以外の話ができなかったのが心残りだ。けれど、高校生活からだいぶ時間が経ってしまった今、普段高校生と話す機会はほとんどないのでよい刺激になったし、自分自身を振り返るという意味でもよい経験となった。少人数の参加者というのがかえってよかった気がする。(文学部3年・森田亜由美)

ボランティアの学生たちが、児童・生徒と接することにより、いかに多くの豊かな経験を獲得しているか知ることができるであろう。思わざる事態に遭遇すること、あるいは児童・生徒の心を思いやることなどが、自然のうちに、人間についての理解を深めさせているのである。さいわいなことに、このような機会を再度持ちたいという意欲が喚起されていることで、さらに学生たちの「自分砕き」が進められ、人間的な力量を蓄えていくに違いないと考える。

この実績をふまえ、彼らの活動をさらに充実させるために、東北大学教育学部と仙台市教育委員会とが学校参加ボランティアに関する協定を締結して、その教育的環境を整えることにしたので、これを次に記録しておく。

4. 東北大学教育学部と仙台市教育委員会との協定締結

学生の学校参加ボランティアをさらに発展させると同時に地域社会への貢献をするために、東北大学教育学部・教育学研究科と仙台市教育委員会とが、2004(平成16)年2月20日に協定を締結するに至った。

当日の出席者は、東北大学側が、教育学研究科科长(教育学部長)菊池武剋、同教授水原克敏、同事務長清水好一、同庶務掛長片平勝美の4名と、学生が教育学部2年中島冬美、同4年渡辺紀子、文学部3年森田亜由美、工学部2年柳沢祐介、同3年森田有一、同3年池尻野雄介、教育学研究科博士前期2年渡利夏子、同2年伊藤恵の8名の計12名で、仙台市教育委員会側が、教育長阿部芳吉、教育局次長佐藤壽男、同次長沼田昭穂、同学校教育部長上田昌孝、同学校教育部参事大野栄夫、同学校教育部指導課長菅野雅克の6氏である。

協定書への署名・調印の後、菊池研究科長は、



学生ボランティアに関する協定書

仙台市教育委員会(以下「甲」という。)と東北大学教育学部及び同大学院教育学研究科(以下「乙」という。)とは、乙の派遣する学生が、甲においてボランティア活動をすることをあたり、以下の通り合意する。

(目的)

第1条 乙の派遣する学生が、甲の教育活動においてボランティア活動を体験することにより、甲の教育の充実・発展に寄与するとともに、乙の学生の教育上の諸課題に的確に対応する実践能力を育成することを目的とする。

(派遣学生の選定)

第2条 乙は、東北大学全学部及び東北大学大学院全研究科に所属する学生の中から、活動を希望する者を甲に推薦し、甲はその推薦に基づき乙に派遣を依頼するものとする。

(ボランティア活動内容)

第3条 派遣学生のボランティア活動の内容、派遣期間及び甲による受入れの条件は、甲、乙及び派遣学生の三者合意の上で決定する。その他、ボランティア活動について必要なことならば、甲の校側長と乙の派遣学生との合意により事前に決定する。

(その他)

第4条 本協定に定めのない事項や、ボランティア活動中に新たな問題が発生した際には、甲乙協議のうえ、決定する。

本協定の締結を証するため、本書2通を作成し、甲及び乙は記名押印のうえ、各自1通を保有する。

平成16年2月20日

甲 仙台市教育委員会教育長

阿部芳吉
教育委員会教育長

乙 東北大学教育学部長・大学院教育学研究科長

菊池武剋

次のように挨拶した。「本日ここに東北大学教育学部と仙台市教育委員会との学生ボランティア派遣に関する協定が結ばれましたことは、東北大学そして教育学部にとりまして大変意義深く喜ばしいことでございます。今、ご承知のように国立大学は、法人化という大きな変化の中にあります。その中で大学の社会貢献、地域貢献が求められております。東北大学は、その基本的あり方のひとつとして、地域に開かれた大学ということを掲げておりますが、この協定はそれに関連するものであります。今後この協定を基に仙台市と大学との交流がいつそう進展することを期待するものであります。今日、大学を含めて学校教育は、多くの課題を抱えておりますけれども、その基底には学校が地域から孤立するという、そういう状況があるのではないかと、私は考えております。教師も子どもたちも学校という枠の中で、決められたことしか経験できない、そういう状況があるように思います。これは小学校、中学校、高等学校に限らず大学にも言えることだと思います。それぞれの学校が地域に開かれた、地域との交流の中で豊かな体験を積み上げることが、子供たちの発達にとって必要なことであります。それはまた教師にとっても必要なことであると思っております。このような意味で、ボランティア活動は大変有意義なものであると考えております。ボランティア活動を通して、一人ひとりが成長し、学校と地域がいつそう活性化することが期待されます。そういうことを期待いたしまして、ご挨拶いたします。」と。菊池研究科長はボランティア活動の教育的意義と大学を含めた学校が地域とともに発展することの重要性を説いたのであった。

これを受けて、阿部仙台市教育長から協定締結を「大変うれしく思う旨の」挨拶があった。その話の中で、学生が授業に参加した例を挙げ、「学生が新鮮な心で授業に参加しますとその授業そのものが引き締まるような、また、子どもにとって、ほっとするような、そんな授業になっていました。」とその教育的効果が述べられた。また、学生ボランティアが「授業をサポートすることによって、学生さんが子どものような純真さを失わないで、命の輝きをずっと保ち続けて、日本をリードするような立派な大人に育って行かれることを私たちは期待しています。」と、学生自身にとっても人生の成長の糧になるボランティアであるよう期待が表明された。

この後、参加者の自己紹介に入り、水原からは、「学生たちに自分探しの授業をしていまして、それを発展させるという意味で、学生たちが少年少女たちと学校でいろいろ交流することがより望ましいのではないかと思います。学校参加ボランティア・プロジェクトを進めております。ぜひ、青年の人づくり、いい青年づくりに、世界をリードする青年づくりに小中高の先生方、学校のほうでも、ぜひ、ご協力のほどお願い申し上げます。」と教育委員会管下の学校に協力を要請した。

学生の自己紹介では、8名の参加者から、「小学校と高等学校で学校ボランティアに参加しました。高



校では年が近いということもあり、同じような共有できるようなことがあり、自分を再発見できたという経験ができました。今後ともこのようなボランティアを続けていきたいいな、と思っています」。あるいは「私にとっても充実した経験でした。今後との学校ボランティアに参加していきたいと思います。」等々の挨拶があった。

市教育委員会側の参加者からも自己紹介があった後、第二部として、学生を中心に意見交換会が行われたが、まず、教育委員会の側から、東北大学「学生サポートスタッフ・人材バンク」を開設した趣旨説明と、前年12月から実施してきた学校参加ボランティアの

東北大学「学生サポートスタッフ・人材バンク」

1、サポートスタッフの概要について

◇1 サポートスタッフの目的

市立学校等に関し、学校教育に熱意と関心を持った多様な人材に関する情報を提供し、日常の学校教育活動等において、ともに活動することにより、教育活動を活性化させ、園児・児童生徒の学習意欲や将来への夢を育むとともに、「生きる力」を身に付けさせる。

◇2 ボランティア活動内容について

サポートスタッフの活動内容は、以下により区分します。

- A① 国語、算数・数学など各教科や選択教科における指導補助
日常の学習活動の支援（教科指導補助、実験・実習等の補助など）
- A② 総合的な学習の時間における指導補助（校外学習の付き添いなど）
見学・体験、作業などの指導の補助など
- A③ 特別活動（クラブ活動など）、道徳等の指導補助
児童生徒会活動やクラブ活動、学校行事、道徳の時間における、支援・援助
- A④ 情報教育における指導補助（パソコンの操作指導補助など）
- A⑤ 学校・園行事（運動会、文化祭など）における手伝い
準備活動や先生方の補助など
- A⑥ 学校図書館における指導補助（読み聞かせなど）
学校図書館での、児童生徒への本の読み聞かせや学習等の相談
- A⑦ 放課後や休み時間等における児童生徒の話し相手、相談相手
- A⑧ 除草や清掃など学校環境整備の支援

◇3 活動の場所

基本的には仙台市立の小・中・高等学校、養護学校、幼稚園の敷地内
ただし、総合的な学習の時間等における校外学習により、学校の外で活動する場合も考えられます。

◇4 ボランティア活動までの流れ

〔下図の⑤以降について以下に説明をいたします。〕

- ◎ 市教委は、サポートスタッフ・人材バンクに登録された人材の情報（東北大学「学生サポートスタッフ」人材バンク概要）を、仙台市立学校へ提供する。

〔⑤事業の情報提供〕

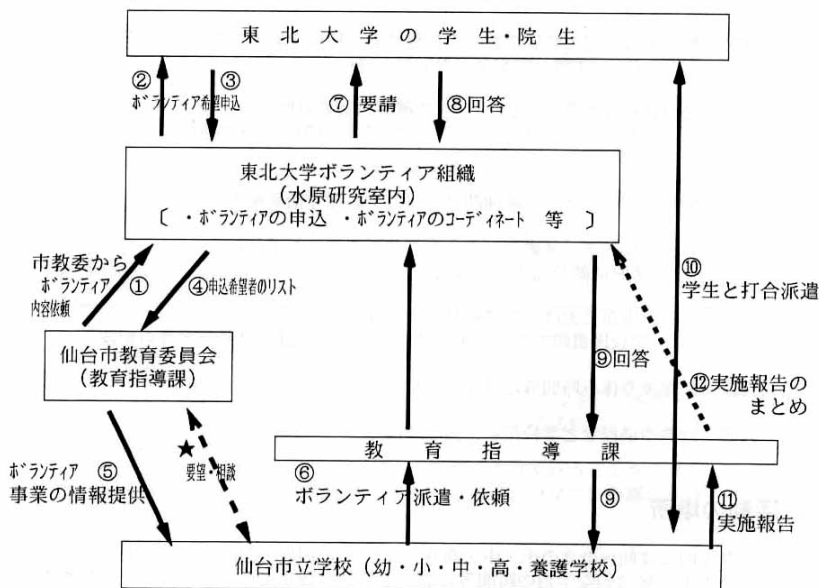
実績が、次の資料により紹介された。

これは、市教育委員会管轄の学校へのボランティアだけであるが、そのほか、すでに私立高校及び県立高校、あるいは社会教育関係にもボランティアを派遣してきている。当日の調印式に参加した学生たちは、前年4月以降、上記の表以外にも多彩な活動を展開してきているが、仙台市教育委員会と提携して実験的試行をしてきたのが前年12月以降2月までの3ヶ月間で、これをまとめると上記の通りである。

学生は、どの学校が仙台市教育委員会の管轄であるかなど、あまり意識しないで活動しているので、これに限らずこれまでのボランティア活動をふまえて、意見を陳述するよう求められた。学生、仙台市教育委員会、そして大学側から様々な意見が出されたので、その主なものだけを拾っておきたい。

- ◎ 各小・中・高校、養護学校の校長、幼稚園長は、要請書(様式A-1)で教育指導課長あて、派遣予定日の三週間前まで依頼。登録学生へは、東北大学ボランティア組織を通じて連絡される。
〔 ⑥ボランティア派遣・依頼(様式B-1)、⑦要請 〕
- ◎ 要請の連絡があった登録学生は、活動日時や内容等を確認し、活動が可能かどうかを東北大学ボランティア組織に連絡し、教育指導課を経由して、要請の学校へ回答する。
〔 ⑧回答、⑨回答(様式B-2) 〕
- ◎ 要請した学校は連絡を受けた学生と直接に連絡を取り、活動内容、時間等の詳細について相談を行う。なお、学生への連絡は、直ちに行うこと。
〔 ⑩学生と打合派遣 〕
- ◎ 各学校は活用後に、様式B-3にて学生の活動の実施報告を教育指導課に提出する。
〔 ⑪実施報告(様式B-3) 〕

《 ボランティアの募集・活用の流れ 》



- お金をもらって家庭教師をやるのと目的意識がちがって有意義な面白さを感じている。
- 問題は足で、近くの人がその学校に行ければいいのだが、足の便がよくない。
- どこにその学校があるのか、どのくらい時間がかかるのか、どのように行けばいいのかわからない。交通費に関しては、もらえない所が一般的なので、自分で払わなければならない。(私立の場合は支払ってくれる。)
- 原付バイクを持っている人は行きやすい。ただ、東北大学生は、宮城県出身者でないことが多く、学校がどこにあるのかわからないという問題がある。
- 学生から見ると、足の都合で近隣の学校の方が便利であるが、行政的に見ると、大学周辺の学校ばかりよくて、田舎の地域はボランティアの恩恵を受けられない課題がある。

II、平成15年度の実施概要について

1、東北大学・学生サポートスタッフの実施状況

(1)、要請件数と派遣件数

	要請件数	派遣件数
小学校	6 件	4 件
中学校	3 件	0 件
総 計	9 件	4 件

(2)、派遣状況について

※ 評価 …… A:非常に満足、B:まあまあ満足、C:まあ満足、D:満足し

校 種	要請番号	要請内容	派遣学生数	評価	成果について	要望・課題について
小学校	A②	グループごとの課外学習のアドバイスとしての支援 〔1日〕	2名	A	調べ方についてのアドバイスや、次の活動の方向性について、どの児童にも1単位時間の中で指導することができた。	手続き等の関係で「やりたい時」に「すぐその場で」サポートを依頼することができず、計画的にしなければならぬ点で、活用しにくい部分がある。
小学校 (2件分) 5年生 6年生	A①	5年、6年の算数で、課題に対する受け付けや指導補助など 〔3日〕	3名	A	担任一人よりも、よりきめ細かい個別指導ができた。少人数指導の新しい指導形態としても考えられる。	特になし
小学校	A②	校外学習で引率補助と学習のアドバイスを 〔1日〕	3名	A	子どもたちとの年齢も近いこともあり、楽しく活動できた。子どもたちも質問しやすく、学習を深めることができた。	単発に行うのではなく、その単元の授業に入ってもらって、一緒に課題を解決していくという活動に発展できれば良かった。

(3)、派遣が不可能な理由

- ①回答期限まで日数がなく、募集を行うことができなかった。
- ②募集を行ったが、参加希望者がいなかった。

- 遠くに行く場合、受益者から100円くらいの料金をもらう仕方で、バス代と昼食代に当てるやり方をとっている場合もある。その時は、集まる子どもたちの保護者たちがその徴収をして手当てをしてくれる。
- 学校に入ってボランティアをしたくても、職員会議では一致できないことがよくあって学校内で活動できない状況がある。それで、サタデー、サンデースクールなど、保護者と協力して学校の周辺で、児童生徒と飛行機を作ったり、風船を作ったりさせるなどの活動をしている。
- 仙台市と協定したので、今後は、学校側も違った対応が出てくるのではないかな。
- 限られた時間でボランティアをしているが、短い時間だけでなく、同一の学校に継続的な関わり方をしてみたい。出会ったのも初めてで、たった50分の授業だけでは深く関われない。
- 毎週同一学校に通うことになるので、ボランティアにとっても負担になるかと思って、1回限りで全員に回すようにしているのが、継続的に深く関わりたい希望はある。
- 継続的に深く関わることで、児童生徒の成長が確認できることで、ボランティアにとっても喜びとなり励みとなる。ある学校に対しては、5人くらいのチームで継続的に対応する仕方もあるのではないかな。みんなが学ぶものだという考え方があるならよいと思う。
- 障害児対応などでは、長期的に継続的に関わることで、卒業研究に役立つこともあるのではないかな。
- 送迎バスがあったらいいのかな、と考えさせられた。
- ボランティアのあり方として、学校教育の企画まで関わるあり方や、ワンポイントだけに関わるあり方など、今後考えていきたい。学校のほうで、そのような募集をしてもらえると、応募することがありえるが、ボランティアの側で独自に企画することは困難である。
- 学校によっては、来られる時にいつでも来てほしいというボランティア対応している所がある。他のボランティア要員にも回さなければならない課題もあり、特定のグループに独占されると別の問題も出で来ないかな。
- 「ひきこもり」への対応などは、固定した要員で長期的継続的であることが求められる。学生が来やすい場所に継続的に関わることならばいいのではないかな。
- 大学で単位の認定とか、感謝状とか、何か成果をあらわす方法を考えることも必要ではないかな。なんらかのキャリアになる形を作ることが望ましいのではないかな、それとも余計なことか。ボランティアのやる気を励ますようなことがあると、さらに広がることになっていいのではないかな。
- ボランティアは、お金に代えられない貴重な経験であり、教職志望者にとってはもちろんであるが、それ以外の進路を目指している人にとってもすごくいい経験になっている。
- 子どもたちにとって、どのような意味があるのか、それが確認できるといい。もしかし

たら、学生と教育委員会にとってだけ意味があるとしたら問題で、児童・生徒の視点から評価・検証してみないと自己満足になりかねない。子どもたちの生の声が聞ける何らかの資料を収録してほしい。

- 学生が成長できるボランティアのあり方を考えると、ワンポイント式のボランティアだけでは限界があるのではないか。
- 学校に学生が入るときに、何らかのワッペンをつけて入らないと、この危険なご時世では、問題が出る場合があるのではないか。何らかの身分証を発行する、そういう方法が必要なのではないか。大学としても必要なのではないか。
- ボランティアの中身によっては、心理学的な研修が必要なものもあるので、当面、そのような専門的訓練を受けなくてもできる教育に貢献する仕方でいいのではないか。
- 先生の補佐がボランティアの原則なので、先生の指導の中で活動していただきたい。
- 我々のボランティア・プロジェクトは、大学生をいかに教育するかという、学生を教育してもらおう、という考え方があるので、これをふまえた学校側の対応を期待したい。
- 学生へのボランティアを呼びかける際には、教育委員会からも協力要請に大学に出向いてゆきたい。適切な時期がきたらお願いしたい。

以上のような意見交換がなされ、大変有意義であった。菊池研究科長からは、無理をしないのでできることから進めてゆくこと、今後とも教育委員会とこのような懇談会を持ちながらボランティア活動を推進することが必要である旨の発言があった。

5. 今後の課題

今回、仙台市とボランティア協定を締結したことで新たな発展をすることが見込まれるので、以下、今後の課題を整理しておきたい。

1. 学校参加ボランティアの教育目的をどこにおくか。

学校参加ボランティア・プロジェクトは教員養成のための教育実習ではなく、学生の「自分探し」と人間的な力量形成をめざしているのであるが、今回の協定を結んだ段階でもそれでよいかどうか。学生の現状を見ると、この方針を今後とも継続していくべきであると考えますが、より広い視野から討議されてよいことである。

他方、学校・教育委員会にとっては、教育実習生とボランティア学生との違いをふまえてどのように対処するか、新しい問題であると思われる。

2. ボランティアの企画と参加方法

学生の意見にもあったように、継続的に同一の学校に関わりたい、児童・生徒一人一人の成長を確認したいという要求があった。これは望ましいことであるが、特定

の学校にボランティアを貼り付けてしまうことが本当によいことなのか、また、個人的に断りにくい性格の学生あるいは断ることが困難な状況を想定すると、やはりボランティア事務局にその仕事を一回ごとに返してもらう原則のほうが良いようにも思えるが、この方法をどうしたらよいであろうか。ワンポイントのボランティア参加と同一学校への継続的な参加、その他多様な参加方法を今後とも探求することが必要で、学校・教育委員会とも協力して、望ましいあり方を検討しなければならない。

3. 教育委員会・学校との連携協力体制

ボランティアの（１）募集にはじまり（２）派遣（３）活動（４）報告というシステムの在り方と事務局体制が今後の課題である。

（１）から（４）の順序で進むが、この手順は12月以来の実験的試行でようやく形が整ってきた。（１）募集も単純ではなく、①学校での募集企画、②教育委員会指導課への申請、③教育委員会指導課から大学（水原研究室、学生のボランティア事務局）へのFAX連絡、という手続きを経る。市教育委員会管轄の学校は手続きが煩雑になったが、ボランティア事務局としては、安易な思いつきのボランティア募集を防ぐことができるようになったので助かっている。市教育委員会管轄以外の学校は直接に派遣要請を水原研究室に送ってきているので、市内の学校でも市立と私立・県立の募集手続きは違うことになる。そして、④ボランティア事務局から100名の登録学生にメールで呼びかけるという仕方をとっているが、これが今回の協定の後でも十分にこなせるかどうかやや不安である。

（２）派遣は、メールで応募してもらっているが、①ボランティア事務局で一定の人数を得、かつ、②情報交換を学校と希望者の双方にとった上で、③派遣者を確定して返信し、④派遣することになる。このようにきめの細かい対応をしないと、事故がおきたり、乱雑な出勤になったりしかねないのである。

（３）活動に関しては、学校で教師の指導のもと補佐的な役割に徹して活動してもらうことになる。このレベルでの問題も現実的には出てくるが、基本は、教師の指導の枠内での補佐的な活動である。

（４）報告は、活動報告でその具体的内容と感想を記述して提出してもらっている。前述の学生の感想がそれであるが、活動内容と問題点が見えてなかなか貴重な資料である。学校側も、教育委員会に報告書を出しているので、双方にとってよい反省材料をまとめている。

このような仕方を当面続けて、システムの安定を図ることにするが、今後全学的に拡大した場合、これだけの事務的なシステムをボランティアだけでやりきれぬかどうか、東北大学全体のボランティアセンター的な役割を負うことになりかねないの

で、1 研究室内の小さなボランティア事務局で今後とも十分に消化できるかどうか心配である。しかし、親身に見守る教官の目がないとなかなか継続することは難しく、狭い研究室で人間的な接触があるからできている側面も見逃せない。

4. ボランティアの研修会

ボランティアの研修会は、学生にとっても、採用する側にとっても必要であるので、3 ヶ月に 1 回程度、ボランティアの体験発表会を開き、意見交換と懇談をしている。なかなか味のある実践も見られ、参加者は興味深く聞くことができ、かつ研修になっている。少し慰労してあげたい気持ちになり、水原編『自分』（東北大学出版会、2001、2003 年）の販売収益を還元する仕方に対応しているが、大学本部より激励のお言葉等をいただくなど広く協力を呼びかけるのも一つの方法かと考えている。

5. 交通費と保険

交通費は、公立の場合は出ないので、自費で対応することになるが、その結果、近場の学校にだけ行くことになりがちで、学生からするとやむをえないが、学校全体の行政を考えるとそれでよいのかどうか、問題が出そうである。派遣する側の教育目的からすると、近い学校であることは問題ない。当面、住居及び通学に近い学校を利用してボランティア活動を展開することが有効と思われる。遠い学校からの協力要請に関しては、交通費等の実費を負担していただく形で対応してゆくしかない。もちろんボランティアであるから謝金はいただかない。

なお、保険の問題は大きな問題であるが、当面、当事者にその安全策を自分でとるよう求めるしかないが、仙台市は、ボランティア参加者に適用する保険が作動しており、関係している私立学校は当該学校で払う形で対応している状況にある。今後、徐々に、ボランティアを支援する保険のあり方が整備されることが望まれる。

以上の 5 点が今後の課題であり、学校参加ボランティア・プロジェクト活動を今後とも展開しながら解決してゆきたいと考える。